

書き留めたものへの愛着



東北工業大学 学長・理事 今野 弘

昭和から平成へと元号が改まる時、私は家族とタイ国にいた。私立大学の一教員だった私が、国の技術協力プロジェクトの一員として当時の厚生省の推薦で、JICA（国際協力事業団；当時）の水道計画専門家として1年の任期で派遣されていたのである。小学生と幼稚園児を抱えるわが家としては、離れての生活よりは、一緒に行くことに決め、幼稚園児も自筆サイン入りの公用旅券を持ってタイのバンコクに住むことになった。

バンコクには日本人学校があり、日本の教科書を使用した授業を日本から派遣された教員が担当していた。バンコクでの住居は、前任者から譲り受けて住居の心配はなかった。しかし飲めない水道水のため大型瓶の飲料水や調理用のガスボンベの手配、備え付けベッド用具など、引っ越し経験のないわが家は、しばらくは苦労の連続だった。お手伝いさんや運転手が雇用を求めてくるが、タイ語しか話せない（もちろん）し、使用人に慣れていないわれわれには、大きなストレスであった。

子供たちは毎日元気にスクールバス通いで、すぐに学校を楽しみ始めた。家内も、タイ語と好きな料理の教室に通い始め、知り合いも増えて生活になじんでいった。私はといえば、価値観の異なる人々との、いままでと異なる仕事で落ち込んでしまっていた。強いストレスで、何かに集中しないと耐えきれないような思いだったのかもしれない。語学学習を兼ねる形で英語と日本語で日記を書き始めた。一か月もすると、毎日を記録することの面白さと大切さを感じるようになり、楽しくなった。やがて、日本の水道も明治時代は途上国で、途上国にはそれなりの理由があることに納得して、肩の力が抜けてからはタイでの仕事も順調になり、帰国する頃には「タイは第二の故国」と言っていた。

タイからの帰国は、派遣期間が半年延長されて1990（平成2）年3月。家内は、趣味の料理教室のレパートリーにタイ料理が加わった。料理好きの家内は、毎日弁当を作ってくれている。私は食事にかかる時間が短いので、家内からよく噛んで食べることを勧められ、少しでも時間をかけるため弁当をスケッチしながら食べることにした。ただスケッチが終わってから食べ始めるので、ゆっくり噛んで食べることは身についていない。

英語で書くのは止めたが日記は続けている。文字も絵も書き留めたものには愛着を感じる。

